
back ! ! !

若桜みずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

back!!!

【Nコード】

N4795V

【作者名】

若桜みずき

【あらすじ】

「何で、あんたみたいな表の人間がこの学園におるん？」

親の転勤により、俺の人生が180℃変わる。

黒歩学園・・・そこはマフィアやヤクザの幹部になるための知識を学ぶ為の、つまり裏社会教育学校であった。

そうとは知らず、転校してしまった俺<五反田希里>

「抗争じゃあああああ!!!!!!」

「ええ!?!」

そいつらは俺の非日常を日常と化している。

「あんた、ちゃんと前見とかんと・・・ケガするで」

銃口つきつけられるのも、慣れてしまうのだろうか。

あはは・・・。

てか、俺の青春を返せ!!!!

プロローグ

「転勤することになった」

そう、父親が言った

「「「へー」」」

俺以外の家族、母さん、兄貴、弟は無関心

「へー・・・って、ええ！？転勤！？」

俺は、思わず大きな声を出す。

「ちょっと、うるさいわよ希里。」

母は手で耳を覆いかぶせている

「いや、てか何で俺以外は衝撃受けてないんだよ！？」

「そうだ希里、お父さんはそのリアクションが欲しかったんだ！！」

あ、何か褒められた。

「いつ引っ越すの？」

弟の由貴が父さんに首を傾けて聞く

「え、明日」

「・・・、明日あああ!!??.」

「「へー」」

何か、おかしい家族がおかしい・・・。

「「へー」」

「「へー」」

「は?何、皆どうした?」

「「へー」」

「「へー」」

「ど、どうなってだよ~~~~!!!!」

「つて、おきて!!きーくん起きろ!!!!」

「うわぁ!!・・・由貴か・・・、それより夢?」

朝の日差しがカーテンから漏れている

今日の天気が快晴だな、こりゃ

「きーくん、どうしたの?うなされてたよ?」

「な、何か変な夢を見ちゃって」

今でも、思い出すだけで怖い・・・というかおかしい。

「はあ、本当に怖っ、じゃなくておかしい夢だった」

「僕、さっき

『HEY、HEYへーたくん』という絵本を読んだけど関係ないよね？」

「うん、それだ★」

「ところで、きーくん」

「ん？どうした」

「はやく準備しなくていいの？」

「何の？」

「だって、今日はお引越しの日だよ!」

忘れてた・・・、それは夢じゃなくて本当だったことを。

黒歩

「希里、学校へ行く準備はできた？制服とか大丈夫？」

母さんが、心配して俺の部屋に来た。

今日は、新しい学校に通い始める日で

小学校や中学校1年生の時のときめき感は全くもってない。

「まあ・・・、できたはできたけど・・・
制服が黒服というのが・・・」

明らかに、制服にしては生地が厚いと思うんだけど。

「何言ってるの、かっこいいじゃない！！軍隊服みたいよ！！」

お母さんはキラキラの笑顔で、俺の制服に見とれていた
妙に恥ずかしくなってくる・・・。

「おお、何？希里の新しい制服？」

げ・・・兄貴!?!
|

ドアから、ひょいと顔を出して、こっちをみている

「へえ、かつこいいじゃん!! 新しい学校で、いい女の子見つかるよ?

まあ、大丈夫か。俺の弟だし」

兄貴《五反田有馬》は、一言で言うと「チャライ」

毎回いつも違う女の人と歩いているのを見かける。何股しているんだろう・・・。

だが、おれより頭が良く運動神経抜群。

「似合ってるってお兄ちゃんも言ってるんだから、自信持ちなさい」

お母さんが、俺に向けてピースするが

「いや、別に、そこは問題ではなく。」

「あ、そういえば、お母さん。香水変えた? 良いね」

でた!!

「お兄ちゃん、すごい!! わかったの!! さすがね♪」

誰だ、こんなチャライやつを産んだのは・・・お母さんまで口説くつもりか!!

俺は、苛立ちながら家を出た

「さて、と。なんだっけ？学校の名前？」

俺は、ポケットから紙を取り出す

そこには、手書きの地図と学校名を書いていた

「黒歩学園か、変わった名前だなあ」

交差点を右。塚畑病院をまっすぐ。2つ目の信号機を右。

郵便局を左。

やたら、頭がこんがらがる。この地図と文での案内をかいたのは、兄貴。

「兄貴。絵心だけないんだよね」

もう、地図はあてにならない!!!!

「カラオケしよっぷ」「ミサワ」を左に進んでいくと、

そこがゴールって・・・・・・・・」

書いてある通りに進み、顔をあげた

「ま、まさかここ?・・・な訳ないよねー。」

嘘であって欲しかった。

今にでもお化けがでそうな洋館。手入れも行き届いてなく、荒れている植物。

そして、黒歩学園と書かれているプレートは完全に錆びていた

「ははは。……ってまじかよ。」

俺が、目を通したこの学園のパンフレットには

『創立2年のピカピカの校舎!!』なんて書いてあったのに!!

「絶対20年は、たってるな」

とにかく、門をくぐり校舎に入り、職員室に行こう

黒歩学園の門を俺はくぐった
まず第一段階、ミッションクリア

その時だった

門をくぐり抜けた瞬間、叫び声がきこえた

「よけろ!!!!!!!!!! その男子!!!!」

「え？」

俺は声の主の方に、顔を振り向けた

シュッ

なんか俺の横を通りすぎる

それと、同時に俺の頬に生暖かいものを感じる

頬を触ってみると、触った手は赤の色に染まっていた

「っ、血……なんで!？」

足に力が入らなくなり、地面に座ってしまう

そして、あたりをよく見るとあらゆる武器を持ったたくさんの生徒たちが戦っている。

「アンタ、そこどき」

俺の目の前に、誰かが立ちはだかった

顔を上げて真っ先に目に写ったのは、両手にもっていた二丁拳銃。

そして、その人は俺に言った

「あんた、ちゃんと、前見とかんと・・・・・・・・ケガするで」

銃口を俺に向けながら。

友達1号???

額に感じる冷たい感触。

「っは？」

思わず、そんな言葉が口からこぼれた

今の状況を把握できない

今日、7時に起きて。朝ごはんを食べて。新しく通う学校の支度を
して。

新しい学校に来て。

ただ、それだけなはず・・・

「お、俺・・・」

何かしたか？

いろんな思いが頭の中でフル回転する

「これで、終わりや」

その人は笑みを浮かべる

ゆっくり引き金が引かれると同時に、俺も目をぎゅっとなぶる

「さいなら。」

キンコーンカーンコーン

その状況に相応しくない、POPなチャイムが鳴る

「なんや、もう終わりか」

額に冷たい感触が消える。

俺も恐る恐る、目を開けると、

銃口を向けてきた彼が、地面に座っている俺に向かって、手を差し伸べていた

「え？」

「はよ、いかんと先生から怒れるで！！はよ、立ち！！」

さっきとは、違う雰囲気。

俺は、手を出し、ぐいっと引っ張られる。あまりにも力強く引っ張られた

「あんた、大将のくせにやけに、ヘタレやな……」

「何……？大将って。」

「何言うてんねん！！大将は、大将やろ？このゲームのボスやないか！！」

ゲーム？何を言ってるんだ！？

俺はかなり困惑中……。

その俺の表情を察してか、彼は目を丸くする

「ま、まさかあんた大将ちゃうんか!？」

「よくわからないけど・・・俺は大将じゃないし、今日転校してきたばかりだから!!」

「転校生? ああ!! そういえば、萌黄が来るとか来ないとか言ってたような。」

彼は首をかしげ、考えこむ

キンコーンカーンコーン

2度目のPOPなチャイム。

「つや、やばい!! そんなことより、はよ教室いくで!! 2度目のチャイムは死を告げるチャイムや!!」

彼は、俺の手を引っ張って校舎に向かう

あまりに、走る速度がはやすぎる。引っ張られてる、こっちの身になってほしい

「あの俺、職員室に。」

「何?、ああ、俺の名前は 阪本京さかもと けいや!!」

違う、完璧、そんなことは聞いてない。

「だから、職員室に……」

「もっとスピードあげるで!?!」

やっと阪本……くん、の走りが止まる

「はあ．．．はあ．．．ごぼっ!」

完全な息切れ状態の俺。

「ここや、俺の教室。」

彼が指さす先には、1年拾組というプレート

「違う。俺は、職員室に．．．ごぼっ!」

「職員室?それなら、隣。」

言葉の通りとなりを見ると、そこは職員室。

「あ」

腑抜けた声、自分でもそう思う。

つまり、第2ミッションクリア？

真実

「し、失礼します」
緊張で、声が震えていた

職員室の扉を開けると、そこには・・・・・・・・

「いやーん、治家^{はるや}先生のエッチ？」

「そう、言わずに今日飲みに行こうよ」

《ナンパ現場》

ボタン

条件反射で、扉を閉めてしまった・・・。

「って、治家先生!! 生徒の前で何してるんですか!？」

再びドアが勢い良く、開き、さっきとは違う若い男の先生が出てくる

「君、もしかして五反田希里ごたんだきりくん？」

「は、はい」

「待ってたよ、!!」

僕は今日から君が転入するクラス1年拾組の担任 萌黄もえぎ 美春よしはる。
よろしくね」

萌黄先生は、耳にピアスをつけているものの。メガネをかけていて、
いかにも知性あふれる感じがし、優しそうだ

なぜか、ほっと安心してしまう

「拾組・・・って、阪本くんと同じ!？」

ハッとした。

「もしかして、阪本と友達なのかい？」

「いや、なんと言いますか・・・殺されそうになったといひますか・・・。」

実際、ファースト コンタクト 第一印象が悪いだろ。

「それじゃあ・・・・・・」

さっそくですが杯を交わしましょうか？」

「そうですね杯を交わしましょうか♪・・・じゃなくて!!へ? さ、杯!?!」

「そうですよ、それがこの黒歩学園の入学のしきたりです」

「だって、酒は飲んじゃダメでしょう!!!!」

「そんな、本当に酒を呑むわけ無いでしょう。実際の飲むのはオレ
ンジジュースです」

な、なんだそれ。

「杯を交わすって、なんかヤクザの人がすることみたいですね。は
はは」

軽い感じに笑ってみる

「黒歩学園はマフィアやヤクザ組織の幹部になるための知識を学ぶ・
・・・

別名 裏社会教育学校ですからね。そんなことは当然ですよ」

思わぬ。大問題発言。
俺は、耳を疑った。

ようこそ

「マフィア？ヤクザ？」

この先生なんて人だ、かなりの問題発言をさらっと言いやがった

あまりにナチュラルすぎる

「はい？どうかしましたか？」

「どうかしましたっていうほど落ち着ける内容じゃないですよね。そんなこと初めて聞いたんですけど！！！」

何ですか！？裏組織の幹部になるための知識を学ぶ学校って！！かなり危ない場所じゃないですか！！！」

何かが、納得できた部分もあった。

朝のあの、惨劇は、ここがこういう学校だからか……

「ふふふ、危ない場所と思うかもしれませんが。
今まで、近所の人から苦情きたことないんですよ★」

キラキラの笑顔＋ドヤ顔の萌黄先生。

「まあ、とにかく、この黒歩に入ってきた以上潔く希里君もこっち
の道があるんじゃないですか」

「公務員の父親と至って普通の母親から、
なんでいきなり裏の道歩く子供ができるんですか!!!!」

「郷に入っては郷に従え!! 希里くんの両親からはもう学費を払ってもらっているの

でもこうもないです!.....では、杯を交わす準備を。」

そうだ・・・、両親はもう学費を払っている。

俺は、この学園で青春を謳歌しなければならないのだ

。青春を満喫するというよりは、地獄を味わうような気がする.....

「お、俺の青春があああああ!.....!」

嘆く俺に、萌黄先生がポンと肩に手を乗せる

「案外、ここはね。芯が通っている学園だよ。すべてが怖いものじ

やないさ

卒業したときには、多分 体力面でも精神面でも強くなっていくと思う」

「っ……、はい」

先生の言葉に何か、安心感を覚えた

「五反田希里君、黒歩学園へようこそ」

杯を交わす……これが、この黒歩の入学のしきたりらしい。

「それでは、希里君。カンパーイ!!!!」

「か、乾杯」

俺と、萌黄先生の杯の音が響き

先生は酒を。俺はオレンジジュースを飲み干した

なんか、俺が思っていた《杯を交わす》とかなりかけ離れていた
むしろ、ユルい感じでよかったのか……？

「萌黄先生、勤務中に飲酒していいんですか。」

ふとした疑問。

「心配ないさ

この学園の教師は、みんなお酒に強い人ばかりだから大丈夫に決まってるレロ・・・」

「完璧、先生ラリってるんですが！！！！！！」

「まあまあ、それよりはやく教室に行こうか」

萌黄先生は千鳥足ながらも、職員室のドアをガラッと開け、廊下に出る

職員室の隣にある、俺が今日から転入するクラス「1年拾組」

どんな人がいるか、心配だ・・・ただでさえ危険な学校だっていうのに。

「おはようございます」

萌黄先生の明るい挨拶で俺も教室に入場

ああ、どうしよう椅子とか机とか投げられたら!!!

多分今の俺はビクビクしまくっていると思う

「あざーす」

「おはようございます」

「good morning!!」

「あ、もしかしてその子転校生?」

恐る恐る目を開けると、その教室には至って普通の生徒たちがいた

誰も制服を乱してはいないし、そこまで怖い雰囲気がない

「すごい」

俺は、感動を覚えた。

「おーい!!」

阪本くんが俺に向かって手をブンブンと振っている。席は一番後ろだ。

「みなさん、今日からこのクラスで一緒に勉強することになった五反田希里君です。」

「五反田希里です、よろしくお願いします!!!」

クラスの人の反応は、俺が思っていたよりは良い

中には拍手してくれる人もいたし。

「んで、センセ。どうするんですか？学級委員長決めするんすか？」

一番前にいた男子が、質問した。

「ああ、そういえば！！そういうことになりますね。でも本人の意志を聞かないと・・・。
希里くん？」

「はい？」

萌黄先生が、俺をニコニコの笑顔で見つめていた

嫌な予感がするような、しないような・・・

「希里君は、このクラスの学級委員長になりたいですか？」

「が、学級委員長ですか？」

拍子抜けな質問だった。しかも、いきなりだし

「学級委員長って他の委員よりめっちゃ楽だぜ」

阪本くんがそう叫んだ

「そうそう」

他の生徒もそう促していた

「五反田くんにやってほしいな」

「俺も、同感!!」

「私もそう思う」

こんなに人から、推されたことはない。だから気分が良いな

「や、やってみようかな」

「やりますか？」

1分間ぐらい、考えた。そして出た答え……

「やり・・ま、す」

その言葉を俺が言った瞬間、ただならぬ殺気を感じた

それと共に、クラス人が歓声をあげた

「はじまるぞー！ー！ー！！！！学級委員長決戦！！！」

は？何っていった

「学級委員長はクラスで一番強力なボスの存在。つまり、学級委員長になるってことは

このクラスで一番強くなくてはならないんだけど、まあそれを証明するのが戦闘っていうわけなんだよねー。」

萌黄先生、あんた説明も軽すぎます

「簡単に言えば……」

俺が学級委員長になるためには、このクラスの全員と戦って頂点を取れと!？」

- ・ 「いやいや、全員じゃないよ。戦うのは、現学級委員長である……」

四カ羽しかばねみそら美空さんとだ。」

コツコツ

コツコツ

俺に向かって近づいてくる足音。

「君、私と戦いたいんだって？」

その凜とした声が、静寂を生んだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4795v/>

back!!!

2011年12月5日21時46分発行